

日本の農業をもっと強くしたい 経営の視点こそ必要なんだ

かっちりしたスーツに赤いネクタイ、腰ぎ上げた革靴……。エリートビジネスマンを思わせる風貌から、農業の「の」字も連想できない。だが、ひとたび口を開くと愛する農業をくまなく行けにする熱い男がいる。農業専門の経営コンサルタント会社「コネクト・アグリフード・ラインズ」(東京都港区)代表、熊本伊織さん(36)だ。農家やJAの経営支援、地方自治体が実施する農業経営塾の講師などを務め「日本の農業を変えたい」と全国を飛び回る。

☆☆☆

農家コンサル(代表)

くまもと いおり
熊本伊織さん(36)

東京都港区



長野県が開いた研修会で、若手農家に経営感覚を持とうと呼び掛ける熊本さん(長野市で)

2月18日、熊本さんが立ち上げた「信州農業MBA研修」の修了式。受講生が1年間学んだ内容を踏まえ、自らの農圃の事業計画を

3日

発表した時のことだ。「あなた3年後のビジョンは、今年中にできてしまおう内容だ」と、自らの農圃の事業計画を

「と信頭を寄せる。この研修は、長野県が企業目的な農業経営者を養成するの地域リーダー候補を輩出、いわば信州農業の「登壇門」的な存在だ。研修に参加した松川町でリンゴなどを栽培する鈴木一弘さん(35)は「厳しいが、的確な指導をもらえ

る。何より農業への愛を感じた」と、魅力を引き出した」と強く思った。

当初は、「農業をビジネスとして成立させる」との一心で企業参入を呼び掛けるため、全国を奔走した。農業を学び、地域にも受け入れる企業にしよつと、自らの畑を借りて農作業に助んだ。地域の寄り合いへの参加、店頭販売、PO(P:店内広告)作りなど何でもやった。時には東京から愛知県へ畑に水やりに通い、千葉県では夜通しタマネギの苗を80枚手植えた。妻子に愛想を尽かされたところ、農家や自治体から声掛かり始めた。

ただ、企業の農業参入を断るうちに、次第に不安も出てきた。「大企業が合理的な考えで農業を始めたら、個人農家はとても太刀打ちできない」

企業と対等な立場になるためには、農家も経営を学ぶことが必要と感じ、多忙な農家でも参加できるインターネット配信を利用した経営講座を企画。行政主体の農業経営塾も開講した。

これまで手掛けてきた農業経営を学ぶ場づくりは長野県を含め8府県。ノウハウを伝授した農家は500人以上。これからは農村保全や地域の維持そのものがビジネスとなる。渡された地方に新たな仕事をつくり、黒字にしたい」と先を語る。岡田に「無駄だ」と言われたことを形にしてきた熊本さん。だからこそ見える未来だ。

大阪府豊中市出身で農業とはまるで縁がなかった熊本さん。2007年、当時勤務していたコンサルティング会社で環境ビジネスを立ち上げようと群馬県の野菜畑を訪れたことが、きっかけをつけた。地元で農家が育てたニンジンをかじった時、「うまくて感動した」。自然と向き合う農家だからこそ詰める哲学を聞くうちに、「体中に電流が走った。日本の農業を強くし、魅力を引き出したい」と強く思った。

当初は、「農業をビジネスとして成立させる」との一心で企業参入を呼び掛けるため、全国を奔走した。農業を学び、地域にも受け入れる企業にしよつと、自らの畑を借りて農作業に助んだ。地域の寄り合いへの参加、店頭販売、PO(P:店内広告)作りなど何でもやった。時には東京から愛知県へ畑に水やりに通い、千葉県では夜通しタマネギの苗

(熊本伊織さん)